



説教要旨「物語は終わらない」

ルカによる福音書 24章 1～12節

十字架上で息を引き取ったイエス様の亡骸は、安息日が迫っていたため、香油を塗って弔うことさえも出来ずに、急いで墓に納められました。そして安息日が明けた週の初めの日、婦人たちはイエス様の遺体に香油を塗り弔うため、墓へと向かいましたが、墓穴を塞いでいたはずの石がわきに転がされ、イエス様の遺体はそこにはありませんでした。途方に暮れる婦人たちの前に、輝く衣を着た二人の人が現れ、こう告げたのです。「なぜ、生きておられる方を死者の中に捜すのか。あの方は、ここにはおられない。復活なさったのだ。」(6節)

“弔い”とは、死んだ者との関係に区切りをつけて、終わったこととして、新たに歩みだすための行為です。イエス様を弔おうとして墓に向いた婦人たちは、イエス様と共に歩んだ日々区切りをつけ、終わったことにしようとしたのです。しかし、お墓が空っぽだったために終わりにできなかつたのです。婦人たちも、弟子たちも、誰もイエス様の弔っていません。区切りをつけてお終いに出来ないままなのです。なぜなら、ここで終わりにしてしまったら、救いが閉ざされてしまうからです。それは神様の御心ではないのです。

神様の救いは閉ざされてなどいません。「勝手に終わりにするんじゃない。お前たちの救い主は今も生きているのだ。」そんな声が聞こえてくるような気がします。わたしたちのこの世の歩みには、どうしようもないように思える困難が、苦難があり、悲しみがある。その中で、無力さに打ちひしがれ、虚無感に覆われ、すべてが終わってしまったかのように思えることがあります。しかし、わたしたちが絶望に打ちひしがれて、諦めて、終わりにしようとしても、神様が終わりにさせてくれないのです。

復活が信じられなくても良い。半信半疑でも良い。イエス・キリストの物語は終わっていないのですから、これからイエス様の物語を経験していく中で、信じる者とされていくのです。イエス様が繋ぎとめてくださった神様の愛に信頼して、共に歩んで参りましょう。